

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷五十三第

行發日一月七年七和昭

論 叢

經濟統制の理論的根據

經濟學博士

作田 莊一

租税と公益

法學博士

神戸 正雄

政治算術附地方算法に就きて

法學博士

財部 靜治

時 論

恐慌打開策としての『購買力補給案』

經濟學士

谷口 吉彦

研 究

統計比率に就いて

經濟學士

蜷川 虎三

金數量説の發展に就いて

經濟學士

松岡 孝兒

幕末の財政紊亂について

經濟學士

大山 敷太郎

說 苑

貨幣の主觀價值について

經濟學士

柴田 敬

金融機關としての預金銀行の地位

經濟學士

中谷 實

スミスの歴史學的教養と環境

經濟學士

竹中 靖一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

經濟論叢

第三十五卷 第一號 (通卷第貳百五號)

昭和七年七月發行

論

叢

經濟統制の理論的根據

作 田 莊 一

一

經濟統制は可能であり必定であるか、更に現實であるか。經濟統制が行はれる根據如何。ここでは經濟統制を行ふべき當爲の根據たる規範をば問題としない、唯だ統制の事實を理解せしめる存在の法則を明かにして見たい。

經濟統制と言ふは、我等が經濟生活に於て一定の目的を實現するに當り、個々の經濟行動に對して行ふ所の統一的指令を意味する。統制は意志の作用であり、自然の機制と異なる。制するものは我等の生活意志であり、制せられるものはその意志の下に立つ個々の經濟行動である。この場

合に個人の經濟生活ならば個々の經濟行動のみが制せられ、團體の經濟生活ならば個々の經濟行動を總括する各個の經濟生活者も亦制せられる。

經濟統制は先づ各個經濟生活に於て行はれる。これが可能であり必定であり、更に現實であることは言を須たない。ここでは唯だ良き統制が問題となるのみ。總體經濟生活に於て始めて統制の有無が問題となる。

總體經濟生活の統制は、總體の富に就て、その生成を豊かならしめその歸着を普からしめる目的實現の過程に行はれ又は行はれようとするものである。その中でも世界經濟生活には未だ現實の統制なく、その點は何人にも承認される。併しそれは可能であり必定であるか。この問題を提出して解答を與へたものは唯だマルクス説のみである。それは世界革命によつて世界共產社會が成立すると言ふ見解である。この世界革命と言ふは現實の諸國民團體を否定する萬民革命であり、世界社會と言ふは諸國民團體の解消に伴ふ萬民社會である。又この國民團體の否定解消は階級闘争と必然の關係を有すると考へられる。然るにかかる見解は唯だ考へられた一つの理論に止まり、現實はその反對である。國民團體は却つて堅實味を加へ、國民團體を結合する國際團體が世界生活の正面に進み出で、萬民社會はその反指定たる意義を有するに過ぎない。國際團體と萬民社會とが更に止揚されて一元的世界生活を出現せしめる日が果して何時到來するかは、今の所では豫言し難い。殊に階級闘争によつて國民團體を否定解消せしめ、従つて國際團體をも否定解消せし

め、以て單一の萬民社會の實現に到達すると期待することは、現實を無視する空想に過ぎない。

世界經濟生活の統制は國際的統制に於て可能性がある。併しその必定性は今の所では確かでない。何となれば現在の國際團體は各國民經濟の共存共榮を計り諸國民間の利害を調和するだけの目的を懷いてゐるが——それすらも甚だ幼稚であり且つ數々強大國からそれを抑制されてゐるが——未だ世界の富の生成及び歸着に關して考慮し實行するまでに立到つてゐないからである。經濟生活目的から見たる世界經濟の統制は明日の問題である。

今日の問題となれる經濟統制は主として國民經濟生活に就て提起される。國民經濟の統制と云ふは、國民の富の生成及び歸着に就て國民團體意志が總括的統制を行ふことを言ふ。それは可能であり必定であり更に現實であるか。

二

國民經濟の統制に就ては一應、統制の内容如何を確かめて置かなければならぬ。一般に言へばこの統制は、國民團體意志が國民の富に就て生成を豊かならしめ歸着を普からしめる目的實現の過程に於て、個人並にその行動に對し指令することである。この指令は二通りに現はれる。その一は私人の自主的自治的經營に對し、それらをして國民經濟の目的に適合せしめるやう指令するのである。その二は國家が自ら事業經營の任に當り、その經營組織の中に人々を參加せしめ共同して國民經濟の目的を遂行するやうに人々に指令するのである。それらは恰も國家が行ふ所の自

治行政監督と官治行政とに似てゐる。前者はこれを規律統制又は監督統制と呼び、後者はこれを計畫統制又は經營統制と呼ぶ。計畫統制は無論のこと、規律統制と雖も國民經濟の統制であるから、國民の富の生成及び歸着をば正面の目標とする。従つて兵器の製造や血清の製造配給の如き國防又は衛生の特殊目的に出づるものは、國營事業と雖も經濟計畫統制でなく、又經濟行動に對する規律でも民法商法の如く社會交通秩序を維持する目的に止まるものは經濟規律統制でない。國民經濟の目的實現と云ふことが大切で、その爲には規律統制と計畫統制とは同時に行はれ得る。唯だ孰れを主とするかの點より言へば規律統制より計畫統制に移ると言へる。人々は數々この二通りの統制を異質のものと考え、それは個人の私有する生産手段を以てする私的經營の産業と雖も明かに國民團體の機關が行ふ所の國民的生産業であつて、これに對する規律統制も亦國民經濟の目的實現の過程に行はれるものなることを認め得ないで、却つて交通經濟秩序を維持する司法及び行政をも規律統制に屬するかのやうに考へるからである。人々は規律的か計畫的かの區別に過大の重要さを置くが、一層大切なることはかかる統制の形式よりも寧ろその實質にある。國民經濟の統制、殊に國民的生産の統制が、資本主義に據るか勞働主義に據るか、協同組合主義に據るか共產主義によるか、そのやうな區別が大切である。規律統制の下にも勞働主義の私經營があり、計畫統制の下にも資本主義の公經營があり得る。

國民經濟の統制に就て先づ問題となるはその主體の何たるかにある。吾人の所見では、統制の任に當る者は國民團體意志であつて、その意志は國家に存すると見る。然るに従來の經濟學説は概してこの見解を否定する。その中でも個人主義の學説は、國家に依る經濟統制の可能性をも認めない。蓋しこの學説は、國民經濟をば單に國民交通經濟と見るのみにて、國民總體經濟の實在を認めず、國民經濟をば各個經濟の連結關聯に過ぎないとなし、國民を一體とする經濟生活の實在を認めないからである。國民經濟生活なるものなしとする以上は、生活目的を實現する所の統制もあり得ない譯である。従つて此の學説にて統制と云ふときは、唯だ各個經濟間の利害を調和し平準を維持する所の裁判式統制を指す。この學派では數々流通の正義に就て説くが、流通からは決して經濟生活上の正義を發見し又は實現し得られない。謂ゆる流通の正義なるものは、社會交通の衡平を保持するのみにて、それは今日の國際經濟にも適用されて居り、従つて我等が問題とする所の經濟統制ではない。個人主義説では國家に依る國民經濟の統制を不可能事と考へる。否この學派では、經濟統制その事をも全く問題となさない、又なし得ないのである。

これに反し社會主義—マルクス主義—の學説では經濟統制を重要な問題とする。これによれば、經濟統制は専ら無產階級的獨裁政府の樹立から始まると見る。蓋しそれは在來の國家をば有產階級の略取機關と見て、階級對立を第一義的事實と考へるからである。エンゲルスは（空想より科學へに依る）その謂ゆる空想的社會主義に對し、この主義がブルジョア社會をも前代の封建社會と

同様に容赦なく破壊さるべきものと見たことは以前の啓蒙主義よりも進んでゐると推稱するが、それが特にプロレタリア階級の解放でなく永遠の眞理及び正義の見地から全人類の解放を目標とせることを空想的であると批難してゐる。而して彼がその學說を科學的社會主義と稱したる所以は、この學說が十九世紀半頃から現はれたプロレタリア階級意識に根據を置き、又それは、この階級が社會的生産と私有的生産手段との矛盾を克服する所の歴史的使命をば理論的に表現するからであると言ふ點に存する。この見解は學說成立の根據を明示せる點に於て正しい。併しながらこの根據は階級至上觀を執つて、國民團體に於ける國家の地位を一階級の機關に過ぎないとする見解と必然の關聯がある。マルクス、エンゲルスの見解によれば、國家は或時までは有産階級が私有財産制による略取の機關となり、その次は無産階級が私有財産制を解消する機關となり、私有財産が廢滅に歸するときに國家も亦自ら消滅すると考へる。レーニンはこの變遷に就て全國家半國家及び無國家の三時期を劃する。然るに斯の如き見解に對して是非の論を試みることは數々時間の浪費に陷る。若し吾人が國家の語を單に私有財産の擁護者又は排斥者と解するならば、國家が私有財産と必然に關聯して變遷することは當り前のことである。吾人が問題とする所は、かかる國家の作用ではなく、私有財産を斯の如く取扱ふ所の國家なるものは抑も如何なる組織を具ふる自動體なるかにある。

社會主義說は階級至上觀を執る。階級は常に對立する。一階級が常に他階級を抑壓することは

必定であり且つ現實である。従つて階級の對立に於ては統制關係は全く成立し得ない。統制は總體者が目的實現の過程に於て各個者に對して行ふものであるが、階級對立の關係には總體者の目的實現なるものは存し得ないのである。吾人は單なる有産階級の統制を知らない。トラスト的統制は如何に大規模なる獨占資本を以て全社會に對向しようとも、それは國民經濟の一勢力たるに止まり、國民經濟の統制とはならない。ブハーリンは獨占資本家閥と國家との融合によつて國民經濟の統制が行はれると見た。國家が出て來なければ統制は成立たない。如何に大勢力があつても資本家閥だけでは不可能である所の統制が國家の加擔によつて可能となると言ふことは、抑も國家なるものが資本家閥又は有産階級と本質に於て撰を異にする存在であることを物語る證據である。無産階級の獨裁政治と云ふことも亦同様であつて、無産階級だけでは如何に強くとも統制は出來ない。階級である限り、それは單に一方が他方を強壓するに過ぎない。但だ無産階級は有産階級と異り、階級自身が共同主義を持して起つものであるから、それが次第に強大になつて有産階級への壓迫が成功するときは、その程度に應じて同じく共同主義の組織たる國家の地位に上り得る。同時に又その地位の向上は自ら階級としての特質を稀薄ならしめ、やがてそれを消滅せしめるに到るであらう。マルクス說で言ふ如く階級の働きによつて國家が消滅するのではなく、逆に國家の働きによつて階級が消滅するのである。併しこれは本質觀の相違でなく表現の相違に過ぎないであらうが、かく表現を變へて言ふことが自ら國家の本質を如何に見るべきかを暗示す

る。もつとも表現は孰れでも可からう。併し孰れにしても國家と階級とは合致しない。有産階級國家と言ひ無産階級國家と言ふも、國家は常に階級そのものと異なる別の存在である。

私は言葉を約束する。國民團體に於ける共同組織を國家と言ふ。日本人は特にこの約束を善く守り得る。これを守らない人々は、我等が國家と云ふときに、これを國民共同組織の語と差代へて聴取ればよい。そこには國語用法の點の外には何の異議も起り得ない。爭論を生ずる點は、斯かる意味の國家が果して實在するや否やの點である。吾人はこれを肯定し、社會主義説はこれを否定する。この相違は結局は歴史解釋及び體驗意識の相違である。

國民團體の共同組織に於て國民共同意志が生ずる。それは即ち國家の意志である。個人の單一意志でも固より薄弱なるものがあり、また衰弱弛緩することがある。ましてや國民共同意志は國民によつて成長の階段を異にし、同じ國民であつても時に緊張し時に弛緩する。特に國民經濟生活に於て人々の負擔と享受とか甚しく偏るときは、それだけ共同生活の實を失ひ、従つて共同意志を弛緩せしめる。共同意志が弛緩する時は即ち階級意志が強くなる時である。一方に有産階級意志が強くなれば、他方にそれに反對して無産階級意志が強くなる。國民團體意志又は國民共同意志は國家に體持される。その國家の意志が甚しく衰弱するときは、或は此世をば我が世とぞ思ふ有産階級意志が横行し、或は我こそは最後の略取廢滅を遂行すると氣負へる無産階級意志が潜上する。人々はこれをブルジョア國家とかプロレタリア國家とか呼ぶ。その實は、前者にあつて

は有産階級意志が國家に寄生し、後者にあつては無産階級意志が國家に代位する。併し孰れにしても經濟統制の主體は、寄生するものでもなく代位するものでもなく、寄生される又は代位される國家そのものである。併しながら以上の如き場合は國家意志が極度に衰弱せる場合に起るのであつて、ロシアはその實例を提供した。されど衰へたりと雖も國家が尙ほ自ら支ふる生命力を有する場合には、國家は一階級の寄生から自己を救済し、他階級の代位執權を許容しない。一方に對して無能なる國家は他方に對しても無能である。かかる國家はその所在を見失はれる。これに反し一方に對して有能なるものは他方に對しても有能である。寄生される害を自覺する國家は同時に代位される不名譽をも免れるのである。

四

社會主義説は國民團體生活に統一意志の實在することを否認する。従つてそれは國民經濟現象をば凡て社會自然力の表現と見る。エンゲルスは（「空想より科學へ」に依る）次のやうに考へる。凡そ社會的に作用する力は、我々がこれを認識し處置しない限りは、全く自然力の如くに盲目的強迫的・破壞的に働く。併しながら一たび我々がこれを認識しその運動方向・結果を理解するときは、これを我々の意志に服従せしめ、これに依つて我々の目的を達成することが我々の力次第となる。現代の強大なる生産力に就て特に然り。生産手段が一たび社會の手に握られるときは、商品生産は廢除せられ、社會内部に於ける無政府狀態は計畫的意識的な組織に置換へられる。ここ

に至つて人間は或意味に於て初めて決定的に爾餘の動物界から分離し動物的生存條件から脱却して、眞に人間的なる生活條件に入る。今まで人間を支配し人間を取巻いて來た生活條件の外圍は、今や人間の支配と統制との下に服し、人間はここに初めて眞の意識的存在となり、自然の主人となる。蓋し人間は今や自分の社會組織の主人となつたからである。今まで外部的なる自然法則として、人間に對立し人間を支配し來つた所の人間自身の社會的行動の法則は今や充分の理解の下に驅使され、従つてまた人間によつて支配されるに至る。かくて人間は充分なる自覺を以て自ら彼等の歴史を作り、かくて初めて人間の設定したる社會的諸原因が主として且つ愈々増大する程度に於て自己の欲する結果を齎らすこととなるであらう。それは必至の王國より自由の王國への人類の飛躍である。

以上のエンゲルスの見解には地物自然法則と社會自然法則との混同がある。更に彼は我々が社會自然法則を認識すればこれを支配し得ること、恰も電氣の性質を知れば電燈を照らし得るが如く考へる。然るに我々は電氣物理學を學んだだけでは電燈を點じ得ない。それは電氣工學の賜であり、物理學は技術學の前提となるのみ。そのやうに又我々は社會自然法則を知つても、別にその法則を支配する實力を持たなければ、その法則の支配から脱するを得ない。我々は價格の法則を知つても價格を動かし得ない。進んで我々は地物自然法則を知るときは、それをあるままにして地物を利用し得るが、その場合に我々は自然法則の生滅を左右し得ないのみでなく、寧ろその

法則の存在が利用を可能ならしめる。然るに社會自然法則は國家の規律統制の下では尙存在し、統制はこの法則に順應しまたこれを操縱することであるが、已に計畫統制とならば次第に自然法則を除斥して行く。極限的に見れば、統制の完成する時は自然法則の全滅する時である。この時はエンゲルスの謂ゆる必至の王國から自由の王國に入る時であらうが、その進行は決して社會自然法則の認識に由るのではなく、實に社會自然法則を正しく認識し得る所の、且つこれを有効に左右し得る所の團體意志の成長に由るのである。

エンゲルスは計畫統制が行はれるときに、人間は或意味にて決定的に爾餘の動物から分離し動物の生存條件から脱却し、眞に人間的なる生活條件に入ると言ふが、その動物性と云ひ人間性と云ふは人間を單なる社會的生物と見たる偏見である。人の色欲の盛んなるを動物的と云ふが、それは超動物的の言違であらう。それと同様に同種の生物であつて階級闘争を行ふやうな動物は何々であらうか。色欲の多様式なることが人間的である如くに、階級闘争をなすことも人間的である。階級闘争を止めるときに人間が眞に意識的となると云ふならば、過去の人間文化は動物性の産物に過ぎないであらう。惜い哉エンゲルスは人間生活の總容的なものと分際的なものととの分析を缺いでゐる。「我々」と言ふときは、「凡そ人間は」と云ふ場合と我及び彼を合せ見る場合とある。又後の場合に「我々」と云ふとき「我々各個人」を意味する場合と「我々總體者」を意味する場合とある。我々が自然の主人となると言ふとき、地物自然に對する我々は「凡そ人間は」の意味に

於ける我々である。そこには已に輝かしい物質的文化の歴史が開展されて、爾餘の動物から決定的に分離され眞に人間的なる生活條件が獲得されてゐる。囚はれたる無産者はその條件に與り得ないと云へるか。資本主義制が成熟せず又はこれを遠ざけた支那やロシヤの田舎には、その條件に與ることの餘りに乏しい人々もあるであらうが、却つて資本主義制の最も發展せる英米には地物自然の奴隸は恐らく居ないであらう。轉じて人間の團體生活を見ると、そこには超動物的なる階級闘爭が行はれてゐる。この時に或生物學者は、蜂や蟻の群族生活を例に引いて人間を嘲る。しかしそれは譬喩の價值しかない。階級闘爭は人間意志の產物である。我々は闘爭を超へなければならぬが、その前に闘爭を通じて人間意志の實在することを先づ感謝して然るべきである。

然らば團體生活に於て今我々は自然の奴隸であるか。若し國民團體に共同意志が實在しないとすれば、社會自然に對立するものは各個人の意志あるのみ。各個人の意志は社會機構が複雑精緻となるに従つて益々社會自然に支配される。各個人は社會自然の主人でなく従僕である。然るに共同意志が實在するならば、それは已に社會自然の従僕でなく主人である。社會自然は個々人の相互的對立の關係に成立する。その個々人が共同的合一體の關係に入るとき共同意志を生ぜしめ、その意志は社會自然に對し一部を操縦し一部を解消せしめる。凡そ人間は共同意志の存否に拘らず、早くより不完全ながらも地物自然の主人となつてゐる。共同意志が社會自然の主人となるとき、ここに第二の主人性を獲得し、それはまた付隨的に第一次の主人性をも一層確實ならしめて、

人間生活の主人性が形式に於て完成する。

吾人は國民團體に於ける共同意志の實在を肯定する。團體共同意志は獨り國民團體のみでなく世界團體にも成立してゐる。唯だ前者の統一意志なるに比べ後者は聯合意志に過ぎない。この共同意志の實體性の相違が、能く二つの共同意志の同時存在を許容し二者の矛盾を免れしめる。併しながら統一意志は團體生活を全面的に支配し得るに比べ、聯合意志は唯だ團體構成者間の調和を計り得るに止まる。是に於てか國民團體生活の一部面たる國民經濟に總括的統制が行はれるに比べ、世界團體生活の一部面たる世界經濟には斯かる統制を缺如するのである。國民經濟を統制する國家意志は經濟生活特有の團體意志ではなく、唯だ國民總體意志が總體生活の一部面たる國民經濟に現はれるのみである。この點は個人の經濟生活にも特有の意志なく、個人の人格的意志が經濟生活を律すると同様である。人々は個人の經濟生活に就ては、餘りにも明白なる意志の實在をば問題としない。國民の經濟生活に就ては、人々は數々社會自然現象に眩惑されて國家意志の實在を見失ひ、國家は經濟外の存在などと考へて己を欺く者さへ少くないのである。

エンゲルスは空想的社會主義を否定して科學的社會主義を唱導した。然るに社會主義は、空想であらうが科學であらうが、常に社會主義であつて國家當然の任務を否定する。共同意志なく國家意志なき國民團體ならば、それは社會自然力のみが横行する非團體的群居のみ。地上には名義的な日本やイギリスはあつても實體的な其等はないことになる。國民生活は唯だ自然法則に支

配される自然生活であつて、それが自由の王國に進み入る過程は、同じ自然法則が自然に其處に我等を導き入れるだけである。人々は自由の王國を唯だ期待する。この期待を裏切られないやうにするには、自然法則が命する階級闘争に精進すればよい。人々はエンゲルスの謂ゆる動物的生活を戦ひ貫くことによつて動物から脱却し得るのである。然るに斯の如き見解は意志と意志との闘争を見るのみにて、意志の發生及び成長を見ない。即ち自然の流れを見るのみにて、意志の發展を無視してゐる。斯くてエンゲルスの言ふ科學的社會主義は、嚴格に言へば、自然科學的社會主義である。而して社會主義を貫かうとすれば、必ずや空想的となるか然らざれば自然科學的とならざるを得ない。エンゲルスには論理の矛盾はない。體系は立派に成立する。併しこの自然主義觀・唯物觀の見解が眞實なるや否やは別問題である。思ふにエンゲルスは、自然科學が異常の發展を遂げ、地物自然科學から社會自然科學に領域を廣めたる時代の寵兒であらうか。

吾人の見解は社會主義說と異なる。我々は今現に共同意志を有する。その意志は社會的衝動又は本能の盲目的運動を制御し得る。この意志は社會自然からの刺激を受けて自ら奮起し努力して目的の實現を全ふしようとする。目的を懷いて活動し目的に照らして成績を審査し、失敗と成功とを交々繰返へしながら、一路前途の目標に向つて進行する。それは原因より必至的に發動して結果を生ずる所の自然運動と類を異にする。この見解は正しく自然科學と對照される所の意志科學的見解である。國民經濟には自然法則の上に意志法則が存在する。經濟統制の由來は自然法則で

なく意志法則である。社會主義説は前者のみを固執し後者を否定する。吾人は後者を擁立して而かも前者を許容する。

五

獨占資本家閥でも、國家に寄生するならば、國家の力によつて有産者的經濟統制が可能となる。共產黨でも、國家に代位するならば、國家の立場に於て經濟統制が可能となる。孰れにしても國家であれば統制が可能である。幸にして國家が強健・聰明であれば、能く資本家閥の寄生を排斥し共產黨の代位を拒否して、獨り自ら統制を全ふし得る。一般に經濟統制の可能性は一に國民團體生活に於ける總體的統一意志から導かれる。統制の本來の可能性は富豪の金力にも存せず、窮民の腕力にも存しない。

可能は必定を意味しないが、國家意志の經濟統制は可能にして且つ必定である。この必定性は近代國民經濟に於ける國民總體的生産及び消費の機構から來たる。古代後期に發生せる交換經濟に次いで、貨幣交通を媒介とする流通經濟が成長して來た。ここでは國民たる總ての人々が生産者及び消費者として密接に結付けられる。ここに國民の富が事實的に成立し、國民は一體として國民の富の生成及び歸着を計り、總ての人々がその總體的機構及び過程に參加する。斯の如き國民經濟生活の發展に面しては、國民團體の共同組織たる國家が、必定的に經濟機構及び過程に進み入つて、國民經濟の生活主體たる位置に就く。近代初期の統一主義經濟は第一次の經濟統制で

あり、それは近代資本主義の發生以前の出來事である。イギリスはその典型的のものであり、日本は年代を異にしながらも同様の歴史を持つ。この統制の必定は、社會經濟の大なる發展が國家統制を誘引した點に於ては自然必定的である。併しそれは、社會經濟に對する國家統制の決定が國家意志の自決である點に於ては意志必定的である。殊に國家が唯だ現に起る所の社會經濟事件を處置するに止まらず、進んで國民の富の生成及び歸着を計る所の新しい施設をなす場合を見るならば、創造を試みる意志の自決が一層よく看取されるであらう。

國家の經濟統制は可能であり必定であるのみでなく、また現實的であり、永續的である。社會主義說では、經濟統制は無產者獨裁が始まる時に始まり、共產主義制が完成する時に終ると見る。國民共同意志の實在を認めない限りは、統制は今の所現實性を有しない。無產者獨裁と雖も單に無產階級が有產階級を抑壓すると見るだけでは、嚴格の意味に於ては統制とはならない。併し有產階級支配の時代と雖も、その外に國民經濟の目的實現を見る如く、無產階級支配にも階級解消の外に國民經濟の目的實現を見る。殊にそれが計畫經濟である所に明白なる統制の事實がある。併し社會主義說では、この統制も私有財産が消滅する時に消滅し、各人の自由の發展が萬人の自由の發展の條件となる所の自由人の聯合が發生すると考へる。統制即ち權力統制ではないが、現實には權力統制のみが統制であつて、それは共同組織の成立によつて發生し、共同組織の完成によつてのみ消滅する。この共同組織の完成は、各人の自由の發展ではなく、人々が皆完全に共同

意志に參與して全體の分身となり終れるときである。共產主義制とならば、階級略取は廢滅し、生産力は充分に働き出し、物資は著しく増大するであらう。併し物資の豊富は、それが自由財物として與へられない限り、權力統制を廢止する條件とはならない。否な著大なる物資の豊富は共同的生产の賜であり、その共同的生产に總ての人々を合理的に参加せしめる計畫經濟の實行は、今日の租税の如き共同的負擔を制するに比べて殆ど比較にならない程度の周到なる權力統制を必要とするであらう。自由人の聯合と云ふが如きは、イギリスのゴツドウィン、ベンサム、スペンサー等の思想と同列に置かるべき有階級的な無政府的个人主義思想に外ならない。

國民經濟の統制は國家意志によつて永續する。その永續性が失はれると考へられる場合は、唯だ人間の個體性と全體性とが不可思議なる同一體に上り詰めたときであらう。併しかかる統制の永續性は決して統制内容の階段的變化を輕視する意味ではない。近代國民經濟の成立以後、統制は種々の階段を踐んで發展し來つた、今後亦然うであらう。近代初期の統制は初めて社會經濟を迎へて近代國民經濟生活を確立せるものである。次で社會經濟が國民經濟の輪廓の中にて更新なる發展を遂げようとするに當り、國家の統制は自由主義に改められた。更にこの統制が次第に有産階級的統制に傾くに及んで、これに對立する無産階級的統制の要求が高まつて來た。その後は世界經濟の成立發展が國民經濟の進路を制約する時代となる。ロシヤは先づ統制の陣容を一變した。諸國の經濟統制も亦それぞれ著しい變化を惹起さうとする形勢を示し、大體に於ては更

新的統一主義を目指してゐる。この場合にも階級闘争が激甚に行はれる國では、國家意志の發動が推込められて社會革命の形態を取るが、幸に國家意志が甚しく衰へない國にあつては、形態に於ても尙ほ國家の自決的態度によつて新時代の經濟統制が成功し行くであらう。

六

これを要するに、國家意志に依る國民經濟の統制は、單に可能であり必定であるのみでなく、また現實的であり永續的である。又それは永續的ではあるが明かに發達的である。又この統制は階級壓制の如き國民經濟を分割するものでなく、國民生活を包む全面的のものであり、且つ統制の形式として唯一のものである。終にこの統制は、自然的機制と撰を異にするのみでなく、また自然發生的に資本主義生産の崩壞の跡に出現するものでもない。統制は意志の自己決定であり、意志法則に根據を有する。

國民經濟統制は意志法則の表現である。國民共同意志は個人の上に立つ全體性のものなれど、世界に居並ぶ國民團體意志としては、多くのものがそれぞれの個性を有する。ロシアとイギリスと、フランスとアメリカと、ドイツと支那と、それらは決して一樣の統制内容を持つものでなく、大體に於て同様の内容を持つものでも一樣の進路を取つてそこに到るものでない。自己の個性を能く自覺する國民は能く統制に成功し、そこに錯過あるときには恐るべき統制混亂が長く國民を悩ますであらう。

以上吾人は國民經濟の統制が行はれる所の基礎に就て述べ終つた。これに次いで、統制の階

段に於て如何なる事情の下に、規律統制に止まるか、或は計畫統制にまで進むか。又統制の内容に於て如何なる事情の下に、資本主義・勞働主義・協同主義・共產主義等の孰れが支配的のものとなるか。これらの問題は更に考ふべき極めて重要な意義を持つ。

今や諸國には新時代の經濟統制が或は已に行はれ或は將に行はれようとしてゐる。それは現實の進行である。かくて人々は學徒が理論を説く迂遠を嘲つて次のやうに言ふかも知れぬ、現實の進行に面して理論は何の用をか爲すと。然り現實は理論を供給する倉庫であるが、それは理論を超へて進行する。しかしこの場合には、理論を考へる者は同時に現實の進行に参加する者である。個人主義説や社會主義説の如き自然科學的理論ならば、理論が明かになると否とに拘らず現實は進行すると考へられるであらう。併しそれでもエンゲルスは云ふ、自然法則の認識は自然的進行に乗じて爲すべき我等の實踐を指導すると。又レーニンは理論なければ革命なしと云ふ。私見の場合には殊に、理論と云ひ法則と云ふも、自然理論・自然法則でなく、意志理論・意志法則である。而してこの意志は個人意志でなく國家意志である。我々は今國家意志に參與して、この意志が行ふ國民經濟生活の統制に直面してゐる。この意志的存在法則を知ることが、やがて我等の意志的實踐の規範法則を知らしめる前提となる。そこに實踐の指導力がある。こゝでは明かに理論なければ實踐なしと言へる。盲目的な現實の進行は實踐ではなく運動に過ぎない。今や統制更新の機動く。正しく理論を解する者が正しく實踐を進め得る。空想より科學へ。而して自然科學より意志科學へ。